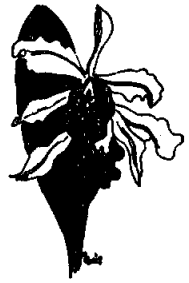


自然保護講座(第一期)を終えて



私の本講座受講の目的は、北海道の自然保護活動のリーダーである諸先生の識見と主張を拝聴し、私自身の自然環境保全への認識を見直すことであった。私は日常の業務の中で、たまに農業開発と環境保全の接点に立ってこれらの問題を考える機会があるのだが、残念ながら特に自然保護等に関わる教育も指導も受けたこともなし、本会の会員ながら会の活動、行事などに参加したことなし、ものの本の拾い読み、学際研究に当る諸先生からの聞きかじり、受け売り程度の知識しか持ち合わせていない。従って自然保護というものの確固たる価値観も定見も見極めているとはいえない、いわば門外漢にほど近い存在の中のひとりとして、きわめて謙虚に学習しようという気持ちで本講座に参加したのであった。

第一期四回にわたる講義は、いずれも内外の自然保護に深い造詣識見をもたれ、それらの学術的研究または地域活動の先端に立たれる方々が講師をつとめられるだけに、その特色、持ち味を遺憾なく発揮されたように見受けられ、まことに興味深く拝聴した。受講者側も大変にまじめな受講ぶりで、むしろその張りつめた雰囲気は題材の固さに比例していささか堅苦しさを感じず、いまま少しリラックスした空気が欲しかった。

以下、各講毎の感想を若干述べてみたい。私独自の判断と偏見のそしりはまぬがれないが、この点お許しを頂きたい。

一、自然保護の歴史をたずねて

俵氏の名著「北海道の自然保護」をすでに拝見していたので、比較的容易に理解することができたと思う。

北海道の自然へのインパクトは遠く松前藩時代に端を発し、明治年間の拓殖計画、昭和二十年代の緊急開拓、三十年代の国民経済の高度成長と、これに伴う観光開発ブームと続き今日に至っている。しかし、いまわが国の食糧自給率の向上のために必要な八十数万ヘクタールの農用地開発の大部分を北海道の森林地帯の農牧適地を対象としていることは、北海道発展計画がその最重要目標としている、わが国食糧基地の建

設にみられるごとく明らかである。

また、苦東工業地帯、石狩新港の開発など、さらに本邦の最北端に位置し、豊かな観光資源を背景に、国民のレクリエーション基地としての利用も大いにのぞまれようから、ますます自然への影響が強くなることが予想できる。

俵氏が「北海道の自然的社会的立地条件を全国的視野から適切に位置付けし、開発についても必要なものはその役割りを評価しつつ、守るべき自然は厳正に保護し、開発が自然に対して節度あるものとなるよう心掛けるべきである」と論ぜられた点に、私は全面的に共鳴を覚えた。

二、日本人の自然観

「うまし国ぞ」「大和しうるはし」と歌い讃えた上代から奈良平安の時代を経て江戸町民が詠んだ花鳥風月に至るまで、連綿と自然を歌い伝えたわが日本民族は、農耕を業としてつちかわれたその閉鎖的精神風土を背景に生きる、自然愛の民族であった。その自然観は、畏敬的、調和的、詠歎的であったにしろ、優れた感受性の豊かな気質の民族であったに違いない。

明治以後、西洋文明の輸入とともに、自然は人のための資源であり、人間の力で統御し征服すべきものとする客観的功利的、自然観が伝えられた。それは今日、豚の丸

焼きと、雀の焼き鳥に例えられる西欧人の人間中心の論理の展開と同種のものである。

また、戦後の科学技術の著しい発達を基調とする近年の国民経済の急成長、社会資本投下の拡大などもたらした自然破壊、公害の発生は数え切れない。しかし、これを科学技術の自信のもとに自然を利用しつくした人間の思い上がりときめつけたり、科学技術の過度の発達への不信感とされれば、かの、ジオルダノ・ブローも浮かばれない。

山本氏は「自然は単に人の生活のための資源としてあるのでなく、全人間的な存在を支えていくくれる聖地であることを知ってほしい」と問いかけられている。

われわれは、自然を管理し調和したいと願い行動する。だが、自然は人智が到底及ばない力をもってこれを拒否する。人間へ科学技術は自然の尊厳の前に畏敬し、少なくとも自然と共存しようとする謙虚さが必要ではないだろうか。上代、山部赤人らの間から芽生え育った日本人の素朴な自然観が、現代の日本人にも受け継がれていることを信じた。

山本氏の造詣の深さに、ただただ驚歎の二時間だった。

三、林業と自然保護

古来から「山の木を伐ると洪水になる」などという迷信めいたいい伝えがある例もあり、森林の伐採などはすべて緑の破壊行為であるとして、反対する一部の盲信的自
然保護論者の存在がないでもないと思われる。

小関氏は、自然保護の文化的概念として「自然保護とは、資源保護であり自然の賢明な利用法である」と論じ、また自然保護とは、自然及び自然資源保護のことであるという国際自然保護連合の提唱を引用された。また稀少価値あるいは美観を尊ぶと天然記念物、文化財などを対象とする保護の手段として現状を維持し、あるいはその回復を図るためには、自然の推移にまかせるよりも適度の人為を加えることが、より有効であるといわれた。さらに、森林のもつ公益的機能、保安林の働き、育成的林業が果す自然的環境の再生回復の役割、林産物生産という経済的機能と木材需要の状況などについても述べられた。

これらの事からは、初歩的に陥ち入りやすい誤った自然保護主張の行き過ぎへの警鐘と私は受け止めた。また、ナショナル・トラスト運動のなしは、私に帰宅後、関係図書を見開く啓蒙を与えて頂いた。

私は、かつて業務上の必要から農林業のもつ環境保全機能について若干の独習を試

みたことがあり、森林の持つ公益的環境保全機能の計量化のことなどにもいくらかの予備知識があつたので、講演内容も理解しやすく、興味深く拝聴することができた。

四、自然保護行政にぞむ

本協会をはじめとする各種の自然保護団体が行政官庁などに対して種々の要望を提案し、その結果が開発行為などにどう反映したかなどの報道は、新聞などで広く世間に知られるところである。

石川氏は、これらの事例及び最近の新聞紙上に上った内外の自然保護または環境保全に関わる話題をとりあげ詳細にわたる解説をされたが、中でも大雪山縦貫自動車道路計画取り下げ運動のことなどは、たいへん迫力を感じた。

北海道には広くすぐれた原始的自然環境が多く、その故に開発と自然保護の相対的競合の発生も多くみられる。また、開発を実行する官公庁と、それを規制する行政機関との間の摩擦や抵抗も少なくない。自然公園、保安林、農用地、都市地域など、それぞれの土地利用規制上の縄張り争いや、官公庁間の面子の問題などがそれである。こうした場合、自然保護団体は野党的立場から自由にその是非を論議し、代替案などを提案し、あるいは要望をするなどの活動を展開するという。

だが、時には官公庁間の緩衝帯としての働きもするという。私には公務員生活の長い経験からその辺の事情もわからぬではないが、一般民間人は果たして緩衝帯的働きなるものを理解できただろうか。非常にひねくれた考え方をすれば、自然保護団体はマッチポンプ的存在にも時には成り得るのかの疑問が生じないでもない。

札幌市の人口は増加の一途をたどりわが国で六位にランクされ、さらに増加の傾向が続くという。大都市の緑地の保全が重要なことはいうまでもない。藻岩、円山、真駒内、月寒、精進川流域、手稻などの貴重な緑地をわれわれ市民は、われわれの手でこれを失わぬよう護らなければと思う。

中国における国土緑化運動、北京市の街路樹の話から思い出したことがある。数年前、中国旅行の折に杭州市の植物園を訪問したとき、この植物園の広さが二五〇ヘクタールに及ぶと聞いた。中は経済植物園、薬草植物園、竹類植物園、被子植物区裸子植物区等々の区分があり、多分に人工的ではあるが実に大規模である。

それに較べ札幌市が誇る北大植物園は、その面積僅か一〇ヘクタールにも満たないそうである。しかも地下水低下、ビル風などの都市型公害も甚大で、余命も危ぶまれるむきもあるという。杭州市ほどでなくと

も現今よりも広い敷地を確保して、移転または分園の建設などの運動を展開できぬものだろうか。

石川氏の講演は、温和ながら終始真摯に進められ、主催者側代表としての本講座への意欲と情熱を強く感じた。

第四日目の講義終了後、お茶を頂きながらの受講者の感想発表があり、いろいろな立場の人が、それぞれの視角から真剣に自然保護というものを凝視していることに驚異し、敬服した。

一講師の持ち時間二時間はいずれの場合も余りに短か過ぎ、受ける側よりも講師の方々には不十分でお気の毒だったように感じた。

今後の講義内容について望むことは過去の自然保護運動の中からマスコミにもとりあげられなかった些細のことでもいいたく、道内各地にあった運動の結果について、その成否にかかわらず事例の紹介などを、お願いしたいと思う。また、この冬の週末の一刻を非常に有意義に過ごせることを幸せに思っている。

(北海道農業近代化コンサルト札幌支所)